

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

山口県美祢市

○学校名

美祢市立大嶺中学校

○学校のURL

<http://www.c-able.ne.jp/~oomine-j/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 7 学級 【特別支援学級】 2 学級 【合計】 9 学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 214 人（平成27年11月13日現在）
（内訳：1年生 68 人、2年生 82 人、3年生 64 人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成26年度人権教育研究推進事業（人権教育総合推進地域事業）
平成27年度人権教育研究推進事業（人権教育総合推進地域事業）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】
思いやりの心と節度をもち学び続ける生徒の育成
～さわやかな大嶺中・規律ある大嶺中づくりをめざして～
【人権教育に関する目標】
○ お互いの人格を尊重し協力し合う生徒
○ 確かな学力を身に付け、真実を追求する生徒
○ 働くことに喜びを感じ、将来に希望をもつ生徒

○人権教育に係る取組一口メモ

地域の方との様々な「関わり合い」を通して、自他を尊重する心を育むとともに、大嶺地域全体の人権意識の高揚を目指す。

○人権教育にかかる取組の全体概要

- 基本的人権の尊重…個人の尊厳を重んじ、人権尊重を実現する態度を育てる。
- 公正な判断力…正しいことを主張できる公正な判断力を養う。
- 正義感の育成…真理と正義を追求し、自己を創造的に確立する主体性と実践力を育てる。
- 社会連帯感の育成…集団の問題を力を合わせて解決する連帯感を育てる。

3. 特色ある実践事例の内容

◆ 地域の方との「関わり合い」を通して、生徒の人権意識の高揚を図る取組

・ 取組のねらい

学校と地域とが互いに関わり合うことを通して、それぞれのよさを発揮し合い、大嶺中の生徒を含めた大嶺地域全体の人権意識の高揚を目指す。

・ 取組の内容

(1) キャリア教育

人権教育の視点に立った取組のねらい

各学年の心身の成長の過程に応じたキャリア教育を行うことを通して、勤労に対する意欲を育み、勤労の大切さを実感させるだけでなく、自分のよさや可能性に気付かせ、自分らしい生き方を考えることができる。

1年生では、「職業講話」を行っている。講師は、特別養護老人ホーム職員、和菓子店経営者、県庁職員など、いずれも大嶺中学校区内の方や中学校に関わりのある方々である。また、職業に対するイメージを膨らませていくために、「職場見学」も実施している。校区内の二つの会社の「職場見学」を通して、「職業講話」で学んだことが、実際の仕事の現場ではどのように生かされているかを自分の目で確かめることができた。生徒たちにとって身近な方からの話は、職業をより現実的に見つめることができるだけでなく、地域に対する誇りや愛情を深め、将来の地域づくりにもつながっていくと思われる。



2年生では、「職場体験」を行っている。美容院、スポーツ店、特別養護老人ホーム、ガソリンスタンド、自動車販売店、病院など、美祢市内外の約50の事業所の協力のもと、そこで働いている方の指導を受けながら、実際に仕事を体験した。このような職場体験を通して、安心感や期待感をもって、自分の能力や才能を伸ばしていこうとする意欲や勤労に対する関心も高めることができた。



3年生では、「面接指導」を行っている。面接指導は一人一人の思いや願いを実現していくための取組でもある。学校運営協議会の委員の方を中心に、地域の方10名が来校され、生徒一人一人が実際に面接指導を受けた。生徒は自分の思いをまとめて相手に分かりやすく伝えることの難しさを感じただけでなく、自分の発言には責任をもたなければならないことを学んだ。また、委員の方と関わったことで、互いに人格をもった一人の人間として接することの大切さや、自分の内面をみがいていこうとする意欲をもつことができた。高校入試を控えた3年生にとって、自分の夢を実現するための大きな一歩を踏み出すことができた。



このような体験活動を計画的に取り組むことによって、課題解決力を高め、自分の希望する進路に進むことができるような力を培っている。

(2) 地域の指導者による指導

人権教育の視点に立った取組のねらい

地域の方々との関わりを通して、自分を高めようとする意欲や態度を育むだけでなく、地域やそこに住む人のよさに気付いたりすることで、自分たちが多くの方々に支えられていることに気付き、将来、社会貢献に資するための基礎力を養う。

○ 部活動

弓道部では、地域の方に、弓道の基礎から丁寧に指導を受けている。その結果、男女ともに県大会で優勝することができ、生徒の大きな自信につながっている。また、技術面の指導だけでなく、弓道に臨む心構えや感謝の気持ちをもつことの大切さ等、生徒は多くのことを学んでいる。このような指導は、生徒の規範意識を高めることにつながっている。

また、指導者の方が校区内に住んでおり、気軽に声をかけることで、生徒は自分たちが大切にされていることや、期待をされていることを感じ、自己存在感や自己肯定感の高まりにつながっている。

○ 立志のつどい

2年生では、平成25年度から「立志のつどい」を行っている。前半は、保護者や教職員が見守る中、生徒全員がステージで誓いを発表した。後半は、大嶺中学校の卒業生で元山口県教育委員会教育長の藤井俊彦氏を招き講演会を行った。藤井氏は、「夢を考えるときのポイント」や「夢を実現するためのポイント」などを話された。このような人生の先輩からの話は、自分自身の生き方や在り方を見つめ直す機会となっただけでなく、先輩に対しての誇りやあこがれをもつことにもつながった。そして、将来の自己実現に向けての意欲をより一層高めることができた。



(実施後の生徒の感想)

- ・ 自分の誓いをこれからの目標とし、何があってもあきらめずに自分の夢に向かってがんばります。
- ・ 自分の言ったことに責任をもち、毎日を大切に過ごそうと思いました。心を成長させるために、とてもよい機会になりました。

○ 修学旅行事前学習

3年生は、修学旅行で奈良を訪れ東大寺の大仏を見学する。

見学する東大寺の大仏には、美祢市美東町の長登銅山で採掘された銅が使用されている。そこで、修学旅行前に長登銅山文化交流館館長の池田善文氏を講師として招へいし、「東大寺の大仏と長登銅山の関係について」事前学習を行った。生徒は地域の貴重な史跡について詳しく話を聞くことで、美祢市と東大寺の大仏との関係について深く知ることや、地域に誇りをもつことができ、修学旅行に向



けての意欲が高まった。

(3) 世界スカウトジャンボリー「学校訪問プログラム」

人権教育の視点に立った取組のねらい

様々な国の人々との交流を通して、互いに理解し合うためには、相手を尊重したコミュニケーションを図ることの大切さを実感し、豊かな人権感覚を育む。

8月に開催されたボーイスカウトの世界大会「第23回世界スカウトジャンボリー」では、参加した各国のスカウトが県内の学校を訪問する「学校訪問プログラム」が行われた。このプログラムは、2年前からスタートしており、生徒は時間をかけて相手国の様子を調査し、ある程度理解を深めていた。

訪問当日は学校運営協議会委員の協力のもと、生徒は約80名のスカウト（スイス、ブラジル、オーストリア、ドイツ、フィンランド、メキシコ、日本）と押し花を使ったしおりづくりを行った。指導者の方が教えてくださることを、生徒が英語や身振り手振りを使ってスカウトへ一生懸命に伝えた。

身振り手振りには、外国の方への敬意を表す表現も多く含まれている。言葉だけでなく、体全体を使った表現の意味を考え実践することによって、相手を尊重することの大切さを実感することができた。このような体験的な学びによって、異なる文化や習慣をもった人々を尊重し、共に生きていく態度を育むことにつながっている。

(4) あいさつ運動

人権教育の視点に立った取組のねらい

あいさつをすることを通して、相手を意識したあいさつの大切さを理解し実践する。

毎月、1日と15日の2回、生活委員の生徒と保護者及び教職員で学校周辺の3か所に立ち、登校する生徒にあいさつをしている。

最初のうちは、生徒同士が恥ずかしそうにあいさつをしていたが、回数を重ねていくうちに、生活委員の生徒に自覚が芽生え意欲的に活動した。

これらの取組を通して、登校する生徒も、朝早くからがんばっている生活委員の姿を見ることで、活動の意義を理解するとともに、委員の活動を尊重しようとする意識が高まってきた。自分を大切な存在として関わってもらえるという安心感は、自分も何かしら返そうという思いを引き起こす。そして、互いに気持ちのよいあいさつをすることにつながっていった。このような取組によって、互いが大切にされていると感じられる感覚を育むことにつながっている。

さらに、あいさつ運動を行うことで、生徒、保護者、教職員が連携することは、学校だけでなく地域における人間関係づくりにもつながる取組になっている。特に、保護者は、子供たちのコミュニケーション能力の育成以上に、子供たちの安全を守ることや子供たちの様子を観察すること、地域の方々と

のよりよい関係を築くことなどの願いをもって参加している。あいさつ運動をきっかけとして、学校・家庭・地域が連携し、地域で何ができるのか話し合う機会ともなり、学校づくり、地域づくりへと発展していくことにつながっている。

(5) 「みね桜まつり」「福祉の市」「三世代交流事業」でのボランティア活動

人権教育の視点に立った取組のねらい

地域の方との交流を通して、自分のよさに気付いたり、友達や地域の方のよさを認めたりする。また、様々な地域行事でのボランティア活動を通して、人のために働くことの大切さに気付かせる。

4月の「みね桜まつり」や10月の「福祉の市」では、出店の手伝いや祭りのゴミ拾いなどのボランティア活動を行った。

さらに、5月に大嶺地区で開催される「三世代交流事業『ふれあい笑顔満開フェスタ』」に、毎年2年生が参加している。実行委員を希望した生徒は、事前準備から参加し、企画にも携わった。当日は、司会、学校紹介の作文や詩の発表、バルーンアートや人形劇などの手伝い等を担当し、フェスタを支えるスタッフの方やフェスタを訪れる多くの方と交流した。

生徒たちは、地域の行事に進んで参加し、責任をもって活動したことによって、地域の方々からたくさんの感謝や励ましの言葉をいただいた。そのことにより、自分たちの自信につながっただけでなく、自己有用感を高めるとともに、地域の一員としての自覚も向上した。今後もこのような活動を続けていき、多くの生徒たちに地域に貢献しようとする意欲や態度を育みたい。

(6) 大嶺地区人権教育総合推進大会での事例発表

人権教育の視点に立った取組のねらい

大嶺中学校で行っている様々な活動について紹介したり、それを聞いたりする活動を通して、自分たちの活動のよさを再確認し、更なる人権意識の高揚に努める。

大嶺地区では、文部科学省の人権教育研究推進事業の指定を受け、11月に大嶺中学校において、「大嶺地区人権教育総合推進大会兼大嶺地区人権学習推進大会」を開催した。

今年度の推進大会では、学校と地域から実践事例をそれぞれ発表することになり、学校の発表は大嶺中学校が担当した。大嶺地区人権教育総合推進地域事業の2年目のキーワードである「関わり合い」について、地域でのボランティア活動やあいさつ運動など、学校の様々な取組を生徒の代表が発表した。大会の参加者は、地域と大嶺中学校が連携し、互いに協力し合って多くの取組を推進していることに関心をもった。

このような機会で、よりよい地域づくりのために懸命に取り組んでいる人の存在を知ることが、人権教育を地域と学校で協働して推進していこうとする意識の向上につながっていく。今後も、学校と地域が一体となった総合的、計画的な人権教育の取組を進めていきたい。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

- ・ 取組を実施する際に生じた課題

地域の方や団体と積極的に連携を図り、指導者として学習に入ってもらったり、支援してもらったりした。初期の段階では、その活動のねらいを達成するために、どの人（団体）に声をかければよいのか、学習効果を上げるためにどのような打合せをすればよいかなど、分からないことが多くあり、こちらが期待するような学習効果を上げることができないことがあった。また、教職員と地域の指導者との間に指導に対する考え方の差が生じたことにより、十分にねらいを達成することができないこともあった。

- ・ 課題に対する解決方法

事前にその時間の学習のねらいを具体的に詳しく説明し、指導者に十分に知ってもらうことで、少しずつ当日の内容を理解してもらえるようになった。また、地域の方に繰り返し指導に参加してもらうことで、地域の方も学校の様子に慣れて、効率よく打合せができるようになり、学習効果も上がってきた。また、コミュニティ・スクールの仕組みを活用して、学校運営協議会の委員の方に指導者として来てもらったり、指導者を紹介してもらったりしたことで、新たなネットワークが広がりつつある。

5. 実践事例の実績、実施による効果

学校・家庭・地域が連携し合い、特に地域の方との「関わり合い」に重点を置いた取組を推進したところ、学校評価アンケートの結果に変容が見られた。

キャリア教育について、「自分にはなりたい職業や夢があり、目標をもって努力している」という質問項目に対して、3年生は2学期の肯定率(5段階の質問のうち、肯定的意見上位二つの合計)が1学期に比べて8.9ポイント上昇している。1年生で職場見学や職業講話を行い、仕事に対する興味関心を高めることや、仕事への心構えを作っている。2年生の職場体験では仕事の大変さやそれを乗り越えて得られる充実感を実感させ、生徒に職業をより身近なものとして捉えさせることで、3年生の面接指導へとつなげている。このような継続した取組が、実際に進路を決定する3年生になって大きな支えとなり、肯定率が上昇したのではないかと考えられる。保護者についても、「学校は、学校行事や体験活動を通して、将来の夢や職業について関心が持てるような学習に取り組んでいる」という質問項目に対して、肯定率が90%を超えている。これは、地域の方との「関わり合い」を重視したキャリア教育の継続した取組が効果を上げていることを示すものと考えられる。



また、地域との「関わり合い」については、「授業や行事の中で、地域の施設を訪れたり、地域の人から学んだりすることができた」という質問に対して、全生徒の肯定率が80%を超えている。このことから、生徒は地域の方が自分たちのことを考えてくださっていることに喜びを感じるとともに、地域や住んでいる方のよさを実感しているようである。さらに、保護者への「授業参観やお子さんの話、学校だより等から、学校は地域との交流を深めている」という質問に対して、肯定率が約

90%という結果が出ている。このことから、地域との「関わり合い」を大切にしながら学習を進めていくことのよさが保護者にも浸透してきていると感じる。

6. 実践事例についての評価

- ・ 取組についての評価、並びに評価する理由

地域との「関わり合い」に重点を置いた取組を行うことで、生徒の自己肯定感が高まっている。学校評価アンケートの「自分は、人にやさしく接している」という質問に対して、肯定率に3.5ポイントの上昇が見られ、90%を超える結果が出ている。これは、生徒が様々な体験活動を通して自分のよさに気付いたり、地域の方からの必要感を実感したりすることで自己肯定感が高まり、周囲の人の支援を素直に受け止められるようになってきたからだと考えられる。

- ・ 保護者や地域住民からの反応

「お祭りにボランティアとして参加してくれたおかげで、お祭りが盛り上がり有難い。」「大嶺中学校の生徒が参加してくれると、みんなが元気になって活気が出る。」という感謝の声を多く聞くようになった。そのことを生徒に伝え、自分たちの力が地域の元気につながることを実感するとともに、更なるやる気につながっているように感じる。地域との「関わり合い」を通して相乗効果が生まれてきている。



- ・ 現在、実施に当たって課題と感じていること

地域との連携・協力のもと、多くの方に指導者として学校に来てもらうことで、随分と教育効果が上がってきている。

今後更に効果を上げていくために、学校運営協議会や地域協育ネット協議会である「おおみネット」の組織を活用し、学校等への支援を通して地域全体が活性化するような取組を継続して推進していく必要がある。

※ 地域協育ネット……………学校・家庭・地域が一体となって、中学校卒業までの15年間の子供の育ちを地域全体で見守るということを目的に行われている山口県独自の施策

※ 地域協育ネット協議会…中学校とその中学校区内の各小学校の学校運営協議会の代表や地域の諸団体の代表が入った組織

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

美祢市立大嶺中学校

地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例である。取組の初期の段階では、地域や関係団体との連携・協力に関する認識や手法の不十分さから期待した学習効果がみられなかったり、ねらいの達成に至らなかったりしたが、コミュニティスクール、学校運営協議会及び「地域協育ネット」(県の施策)等の活用によって、生徒の自他尊重の心を育成するとともに地域全体の人権意識の高揚が図られていく様子が示されている。具体的には、地域人材を活用したキャリア教育(職業講話、職場体験及び面接指導等)、地域の指導者による部活動、郷土史学習、様々な国の人々との交流、あいさつを通じた地域の方々との人間関係づくり、地域行事での積極的なボランティア活動及び自分たちの活動を地域に発信する取組等が紹介されている。また、各活動と人権教育のねらい(規範意識、自己存在感、自己肯定感、問題解決力、地域への誇り及びコミュニケーション能力等々)との関連が説明されていて参考になる。